

被爆者の証言集

『ヒロシマ・ナガサキ 死と生の証言』

(日本原水爆被害者団体協議会編、
新日本出版社、1994年)より

【記憶の喪失】

「8月7日、市内に入った私は、まるで夢を見ているような状態であった。突然『水をくれ!』という叫びが聞こえた。見ると、ガレキの上にあお向けに横たわっている人があった。上半身が真っ白に、トーフのように煮えていた。顔はほとんど形もくずれ、指をふれるとぐじゃっとつぶれそうに見えた。トーフそっくりであった。その姿を見たとき、私の記憶はすっかり脱落してしまった。その日何をみたのか、何をしたのか、何一つ思い出せない。その場所が市のどのあたりだったかもわからない」

(広島 直爆3.0km ~ 男 16歳)

「広島女子商の生徒を、焼けたリヤカーの上に乗せたままあずかったが、記憶が欠落していて、どこで誰から、どのようにしてかがわからない。遺族(その生徒は10日後に死亡)に申し訳なかったなど、記憶の欠落、混乱がある」

(広島 直爆3.0km ~ 女 19歳)

【生き残った負い目】

「冷たい死体となっていった多くの友、さぞ無念であったろう。自分はいまこの人たちの死の上に生きていられる。この負目は一生背負って」

(広島 直爆1.5km 男 19歳)

「自分の元にいた二人の子供すら守ることも出来ず自分だけ助かったことは、すまなく、くやしく、痛恨のきわみです」

(広島 直爆1.5km 女 37歳)

【見捨て体験】

「一瞬にして倒壊した家屋の下敷きになって焼死した母の姿が、今でも眼底に焼きついている。(略)目鼻の前におおいかぶさった建物に

おさえつけられたままで、じりじり迫ってくる火の手、そして死の瞬間を待つ気持ちといったら、どんなに苦しいことだったろうか。なぜもっと頑張っただけで救い出そうとしなかったのか、自分も一緒に死ぬ気になったらもっと何かできたのではないかと、母の死に対する罪意識はつきない。(私は今でも自分の力のなさで母を殺したと思っている。それだけに原爆・核兵器が憎い。戦争が憎い。戦争だからといってこんな残酷な被害は絶対に許せない)」

(広島 直爆1.5km 男 16歳)

「逃げていったところ(稲荷町か?)周りが燃えている家の屋根に、赤ん坊を抱いた母親が叫んでいた。『この赤ん坊を投げるから、受けてくださーい!』わたしは『赤ん坊が死ぬ!一緒に降りて来てー!』と叫び、そのまま火に追われて逃げ出したが...。その母親と赤ん坊は死んだんでしょね。そのことを思い出すと、みじめで、苦しくて、悲しくて、いまも誰にも言えない。そのことを思うと、そのことが頭にこびりついて耐えられなくなる」

(広島 直爆1.5km 女 17歳)

「被爆後逃げる時、私は6ヵ月のおなかで、また、手には満1歳3ヶ月の子ども(頭にキズ失神)を抱き、こんな状態の時、くずれた屋根の下から手が1本出て助けてくれと言われたのに、私は許してください、誰かに助けて貰ってくださいと言いながら逃げました。これは私が死ぬまで、悪いことをした、なぜ助けなかったかと、死ぬまで思い続けることでしょう」

(広島 直爆1.5km 女 32歳)

「己斐の竹やぶにさしかかったとき、“助けてよー、助けてよー”と言う女の人の声でふと見ると、全身チョコレート色のはだかの人が横になっていました。私たちは何もしてあげられないで、ただ見ぬふりをして通りすぎた。

途中、目の前で動けなくなった中学生のそばも、5歳位の女の子が道ばたにすわって目で助けを求めているのに、そのそばも通りすぎて市内からのがれてしまった。

今、ちょっとしたけがでも、すぐに救急車が

来ます。私は、どんなひどい死に方をしても不満に思うまいと思っています」

(広島 直爆 3.0 km 女 14 歳)

「川の中へ逃げ込もうと思って線路を通ると、枕木が燃えていました。4、5歳の女の子が桃色に全身ただれ『お姉ちゃん助けて!』としがみついて来ました。恐ろしくて逃げました。あの子はどうなったでしょうか」

(長崎 直爆 1.5 km 女 14 歳)

「途中、水をくれ助けてくれと泣き叫ぶ人々に、何もしてやれなかった自分が、今では心に傷ついて残る」

(長崎 直爆 1.0 km 女 23 歳)

「医大と浦上天主堂の間の山の中で、30~40歳くらいの女性を助けてくれと言われたのに、見殺しにした」

(長崎 直爆 3.0 km 男 17 歳)

【罪の意識】

「自分が逃げることにのみ汲々として、助けを求める人を見殺しにしたことが、今も心に重くのしかかっている。

橋の上に横たわっていた人を、渡る時にふみつけざるを得なかったが、それは死体ではなく生きていて、『助けてくれ』と叫んで足をつかまれ、その人はそのまま死んでいった。

原爆被爆者は被害者にはちがいないが、私の場合加害者でもある」

(広島 直爆 2.0 km 男 15 歳)

「恐ろしく、心に残っているのは、たくさんの死体をふんで逃げた事。

ひどいやケドの人、私の手足をつかんで、水をほしがった人。そんな人をはらいのけて、自分が生きたいばかりににげた事。

物の下じきになって、私に助けをもとめた人もたくさんありましたが、そんな人に手もかさずになげた事。

死体の山をふんづけてにげた事がゆえに、現在にいたるまで病気で、あるいは人生に、思うように幸せにならないかと、よくなやみます」

(広島 直爆 1.5 km 女 8 歳)

「ボロになった人々が、七転八倒してモガキ苦しむのを見ながら、自分が助かることしか考えなかった私は、現在でもその人々の怨念が私に襲いかかってくるような思いで、いたたまれないのです。それは私がまだ生きているから」

(広島 直爆 2.0 km 女 24 歳)

「どうにかしてちょうだい、どうにかしてちょうだいと、焼けただれた弟に泣きつかれて、何もしてやれないまま、鷹匠町(いとこ)に救いを求めた。(おそろしくなって逃げ出したのかも知れない)

苦しんでいる人達。無残にころがっている人達。その人達に手を貸すどころか、さけて、走り逃げた私。電車の中のおびたしい白骨、焼け落ちた鉄骨の電車に、手も合わせなかった私。遠くから火が押しよせるような気がして、どこをさまよい歩いたのか。いとこ4人の死体はどれであったのか、思い出そうとすると気がくるいそうになる。

8月6日と7日は、私にとって一生忘れることの出来ない重荷だ。今でも夜中に思い出して、あの時私の手段に間違いがあって、助かる多くの人を見殺しにしたのではと、悔やまれる。許してほしい。許してほしい。

8日の午前、やけただれて、水ぶくれになって、うじまでわかせた弟の死にやっと間にあったが、あれほどどうにかしてちょうだい、どうにかしてちょうだいと、頼まれながら、何一つしてやれなかった、それどころか逃げだしたこの兄を、弟よ、許してほしい。心からわびる、この兄だ、許してほしい。許してほしい」

(広島 直爆 3.0 km 男 30 歳)

【後悔・心残り】

「被爆の翌日、牛田原の防空壕の中を5、6歳のと4歳位の兄妹が『お母さーん』と親をよびさけぶ声が、今でも耳のおくにきこえて来る様な気がしています。

夕やみにせまる野原の壕を転々と廻って親をさがし求める幼子を思い出す時、軍隊の統一下にあった自分とはいえ、なぜ声をかけて親を

さがしてやれなかったか、自分はその時歩くことは出来たのに...今になってあの幼子に悪いことをしたと悔いています」

(広島 直爆2.0km 男 14歳)

「夜中、何回も偵察の敵機が飛来した。その都度自分は防空壕にかけ込んだ。その時外に寝かされたままの同僚や、樹下で歩行出来ない人々が泣きさけぶのだが、あまりにも人数が多く、希望を聞けず自分だけが入ったことが、人間としてこれでよかったのかと、いつまでも心に残っている」

(広島 直爆2.0km 男 21歳)

「部隊近くに幼稚園がありました。その建物は火に包まれて燃えさかっており、建物の中で7、8人の園児達が助けを求めて右往左往しているのが目に入りました。私は任務のためその子供達を救うことも出来ず去って行きましたが、戦後40年過ぎた現在でも、どうしてあのとき助けなかったのかと後悔の念です」

(広島 直爆2.0km 男 21歳)

「その夜は竹藪で野宿。一緒になった男の子を、私と戦友とではさんで眠りました。隊の握り飯をうまそうに食べたので安心して眠ったのですが、翌朝男の子は眼を醒まさなかったのです。私達に知られないように静かに死んでいったのです。なぜ名前や住所を聞いてやらなかったのか、今でも時々思い出されて心が痛みます。忘れたいのにならぬこと、思い出したくないのに思い出されるこの日のことと、この男の子のことです」

(広島 直爆2.0km 男 23歳)

「(詳細省略)なぜ昨日の中に住所、氏名だけでも聞いて置かなかったのか、少年に対して自分自身が悪いことをしたように、心をさいなまれ、あの日の少年のために毎年1個の灯籠を流している」

(広島 直爆2.0km 男 26歳)

「生きている、生きている、どこかできっと生きていると信じ、早く元気になって探してや

らねばと頑張った母、息子の成長を生きがいにしていた母に、行方不明の息子は無惨。75歳の生涯をとじるその日まで、記憶喪失になって、どこかで生きているかも知れないと思い続けた。弟よ許して、探して上げることが出来なかったこと」

(広島 直爆2.0km 女 17歳)

「今になって、あの人々に水をさしあげたかった。時々夢にだにみる」

(広島 直爆3.0km~ 男 29歳)

「兵隊さん助けて下さい、助けて下さいと、いくら呼んでも何もすることが出来ず、未だに心苦しい」 (長崎 入市 男 19歳)

「その1人1人に水ものませてやるが出来なく、患部の痛みや火傷の痛みもやわらげてやることも出来ないまま、息を引き取っていった人々に申しわけなく、今40年経っても忘れることは出来ない。私の心残りは、私が死ぬまで続くでしょうね。私達看護にあたった者全員が同じ気持ちだと思う」

(長崎 入市 女 19歳)

「被爆後三日目、強制連行されたと見える一人の朝鮮人の男子に水を求められ、死なせたくない故に与えなかったことを、今もって人生の重荷としてしょっている」

(長崎 入市 女 21歳)

【感情麻痺】

「あまりの衝撃で、本来人間のもっている意志や感情といったものを喪(うしな)ってしまったこと。

あまりの惨状に、なすすべもなく、呆然自失の状態、救援の手をさしのべる余力(気持ち)もなく、見捨ててしまったこと。

爆心部より逃れて、折り重なって身を横たえている市民の方の救いの呼びかけやまなざしにこたえる心を喪い、これらの方を踏みこえて逃げたこと」

(広島 直爆2.0km 男 21歳)

「似島での死体処理作業のありさまが、今でもハッキリと脳裏に残っている。

その当時は夢中でやったことだが…。なぜあのようなことをしなければならなかったのか？

処理？した死体に対し、一度も手を合わせて『冥福』を祈った記憶がない？？ 誠に申し訳ない！！

だからかどうか判らぬが、原爆関係会合等で慰霊黙祷の際、必ず思わず身体が震えるような状態になる」(広島 直爆2.0km 男 21歳)

「歩いていても、人が助けを求める声ばかり耳に入って来ましたが、自分が生きていることが不思議でした」

(広島 直爆2.0km 女 16歳)

「被爆した赤十字病院中でいたところに死体があり、人間の死が厳粛で尊厳なものなのに、少しもそんな感じをしているひまもなくその処理をしなければならずお骨を拾った」

(広島 直爆1.5km 女 25歳)

「恐ろしく思っている事。焼死体を山のように積み上げ、焼却処理をしている傍らで、まるで無感動に、放心状態に眺めていた自分自身の姿」 (広島 直爆3.0km 男 19歳)

「今考えると、どうしてあの時それが平気で居れたのか不思議に思う。ひどく傷ついた人、やけど人、死体を見て、最初はさわるのもいやだったが、二日もすると、まるで物のように感じて扱った」

(広島 直爆3.0km 男 34歳)

「本川橋のたもとで、兵士が焼けた死骸を積み上げて、石油をかけて焼いていたが、その中にまだ動いている者があるのを見つけ、『これはまだ生きているぞ、除(の)けとけや』と言っているのを見た時は、人間はあまりの大きな被害に遭うと、平時の人間の感情を失ってしまうものかと思って、あまりのことに言うべき言葉もなかった」

(広島 直爆3.0km 男 40歳)

「もはや人間という感じではなく、私達もショックが去ったあとは、頭の中が空白になってしまって、怒りも恐怖も悲しみも感じなくなってしまい、機械のように負傷者の間を縫って水を配り、悲鳴をあげている人には気休めの赤チンを塗ってまわった」

(広島 直爆3.0km 女 19歳)

「私は軍人だったので、被爆後の死体等の跡かたづけを行ってきた…(略)

当時は恐ろしさや、かなしみなど、感情どころではなく、もくもくと現実に対して、その処理をしたもので、実にうまく適応した人間になっていた。こううまく事務的になれるものだと、今でも不思議です。(略)

今思えば、地獄の中で、私は、記憶出来るロボットだった」

(広島 直爆3.0km ~ 男 18歳)

「被爆者がそれぞれ叫ぶ声は言葉にならず、余りに想像を絶した情景なのでアゼン。私自身思考力を失った単細胞のごとく動くだけとなる」

(広島 直爆3.0km ~ 男 20歳)

【引き戻られ体験】

「四〇年たったいま、満員電車の人ごみでもまれる時、また、部屋の壁に向かって座ったり、立ったりすると息苦しく感じ、頭の中には下敷きになっていた、あの息苦しさが、当時のまま浮かんでくる」

(広島 直爆1.5km 男 8歳)

「10年間位、夏になると夢でうなされた」

(広島 直爆1.5km 男 22歳)

「これははっきりとは言えませんが、いなくまが人々より異常にこわいのです」

(広島 直爆3.0km 女 15歳)

「今でもけむりを見ると、40年前の事がまざまざと思い出されて来ます」

(広島 直爆3.0km 女 32歳)

「写真をうつす時にフラッシュをたかれると、ぞっとする」

(広島 直爆 3.0km ~ 女 22歳)

「爆弾が落ちた瞬間のあのすごい光、炸裂音、地響き、まさにこの世の出来事とは思えない。あのほんの一瞬の出来事の恐ろしさ、今でもちょいちょい夢に見て、夢であればよいがと思いがさめる。汗いっぱいかいている」

(長崎 直爆 2.0km 男 30歳)

【死別の悲しみ(悲嘆)】

<8歳の弟 8月6日 爆死>

「一人息子を失った父母の悲しみ、肉体的、精神的苦痛は言葉では表せない。

戦後を引きずって、報われないまま父母も死亡。罪もない小学生が、戦争によって短い生涯を閉じさせられる。まして人道的許されるべくもない原爆によって…。生きている限り心の苦痛は拭えない。今生きていてくれたならば、どんなにか心の支えとなったであろうかと」

(広島 直爆 2.0km 女 15歳)

<40歳父・35歳母・12歳兄・2歳妹

8月6日 爆死や圧焼死>

「父、母、兄、妹に会いたい。地獄の中でどんな死に方をしたのか、それを思うと苦しい。今でも両親のことを思って、随分涙を流して来た。私が生きている限り苦しみは続くと思う。私だけが助かったことがくやまれて、『両親と一緒に死にたかった』と思う。素適な両親でした」 (広島 直爆 1.5km 女 9歳)

<父・母 8月6日 圧焼死>

「こんなに黒焼けになるまで、どんなに苦しんだらうかと思ひ、私は泣けて泣けてどうしようもなく、もう足も重く、ぼうーとなってしまう。これこそこの世の地獄と思ひました。父母はどんな気持ちで死んでいったのでしょうか。(略)

生きていてくれたら孫も抱いてもらえ、孫の成長も喜んでくれたのにと重い、親孝行もできず、あまりにもむごい死で、一生忘れることはできません」(広島 直爆 2.0km 女 不明)

<8人家族、1人だけ生き残る>

「祖母と母は死に目にあえたが、何ともむごい姿で苦しみあえぎ死んでいった。未だに目の前に浮かび忘れることは出来ない。妹3人、弟1人は死に目にあえず、また、1人の妹の遺骨は未だに不明です。

こんなむごい戦争、原爆を憎みます。父、母、妹、弟7人を返せとさげびたい。戦後私は11歳でどんな苦しい生活をしてきたことが、口では言えない。現在も後遺症に悩まされている」

(広島 直爆 1.0km 男 11歳)

<20歳と17歳の妹>

「日赤看護婦として前途有望だった20歳の妹。生きていてくれたらと思うことが多すぎる。

帰って来たとはいえ、死に方が余りにむごすぎます。17歳の娘ざかり『殺してよ！殺してよ！苦しい、苦しい』と。

妹2人を原爆でとられた母は1年に10歳ぐらいいふけ込み、25年には妹たちの後を追いました。あきらめ切れません」

(広島 直爆 3.0km ~ 女 23歳)

<父母、12歳弟、3歳妹>

「妹は3歳で死亡した。この世に生を受けて3年、何を目的に生まれてきたのだろう。食糧もなく、母の背で非難の毎日だった妹。何の罪もない妹を奪った戦争が憎い。また私にとって一番大切な肉親を誰が責任をもって返してくれるのですか」

(広島 直爆 3.0km 男 14歳)

<7人家族、1人だけ生き残る>

「今は私1人生き残り、毎日仏様に向かって1人で語りかけています。親が生きていたら、妹が弟が生きていたらと思わない日はありません。あんなに苦しんで死ななくてはいけないなんて可哀想で、孫を見てこれ位の年になんで弟が死ななければと、いろいろと私の心中は今も地獄です」(広島 直爆 1.5km 女 16歳)

<妻と子ども3人死亡。1人生き残る>

「自分の年齢40歳で家族全滅。朝出勤の時、家の前で笑顔で送り出されたのに、中年になっ

で急に独りになった悲しみ、筆舌に尽くし難い。

それから一周忌を済ますまで、毎日長女の遺骨を前に置いてどうして自分独り助かったか...とむしろ助かったことが非常に悲しく、その間新聞はもちろん、雑誌等もみることもなく、外出すれば自分の忘れられない子供と同じ位の子供連れを見るのが悲しく、ただいつどうして自殺しようかと独り涙に暮れていた。あの時のことは現在でも忘れられないできごとです」

(長崎 直爆 1.5 km 男 39 歳)

<18 歳の兄 大やけどで 8 月中に死亡>

「私の母と姉が兄の死を見とったそうですが、苦しみながら死んでいった兄を、母は自分がこの世を去るまで忘れなかったでしょう。

いつも口ぐせに『あの子が生きていたら』『あの子が生きていたら』と言っておりました」

(長崎 直爆 1.5 km 女 9 歳)

【あきらめきれない(行方不明)】

「私は今でも思います。死体を見ない父が、今でも帰ってくるような気がします」

(長崎 直爆 3.0 km ~ 女 8 歳)

「40 年たった今でも、遺体を確認していないため、テレビ等の対面を見ると、もしや私も逢えるのではと、あきらめることが出来ません」

(長崎 直爆 3.0 km ~ 女 13 歳)

「せめて姿でも見れば諦めもつきますが...。3 年くらいは泣きました。未だに子供のことにいろいろ思いをはせ、我が子の年を数えます。今いてくれたら...」

(広島 直爆 1.5 km 女 35 歳)

「とうとう遺体も骨もなく、本当にあわれです。母は私に氷屋に行くように言っていたのを私の代わりに行きこの惨事です。40 年たっても胸がしめつけられるようです」

(広島 直爆 1.5 km 女 16 歳)

「母は動員に出る私を元気な姿で送ってくれ、死んだなど信じられませんでした。いつ、母が帰ってくるかと、待っていました。風の音

がすると母ではないかと外に出てみたり、長い間、母を戸籍から抹消しないでいました」

(広島 直爆 2.0 km 女 年齢不明)

「どんだけ捜しても見つからんし、ラジオの尋ね人をのがさんように聞いたけど出てこなかった。どうしても死んだということは認められなかったんよ。だから、いつか会える思うてラジオ聞いとった(もしかしたらどこかで生きとるんじゃないか)。

どんなむごい死に方したんだろうか。(死んだ場所、死にざま)わかってれば人を頼んでも捜して供養してやれる。骨ひとつ、カケラでもあれば、お寺に持って行って供養してあげられる。拝み屋に何べんも足を運んで(最近)ようやくわかった。海の中に捨てられとったんよね。『寒かった、寒かった』言うんよ。でもどうしてあげることもできん、たちきれんのよね(母への思いが) この思いはきっと死ぬまでつきまとうじゃろね」

(長崎 直爆 1.5 km 女 19 歳)

「なきがらのない妹が、ひょっこり生きて出てくる思いがいつもしていた」

(長崎 直爆 1.5 km 女 20 歳)

【原爆症の恐怖】

「直被(直接被爆)の上に、母同様の動きをしている私も、母と同じ病気、死にざまになると思うと、恐怖はぬぐえない」

(広島 直爆 2.0 km 女 17 歳)

「特に母ががんで苦しみましたので、自分もやがてがんにかかり苦しむ日が、と思うと不安です。被爆したお友達、従兄たちが 50 歳代の若さでがんにかかり亡くなるのは耐えられません」(広島 直爆 1.0 km 女 18 歳)

「父の死に方を見ていて自分も同じようになるのだと思い、自分も不安になりました」

(広島 直爆 1.5 km 男 13 歳)